

オオバノアマクサシダ

上野 勝典*・上野 由貴枝*

Pteris terminalis var. *fauriei* (H.Christ) Ebihara et Nakato newly found
in Nagano Prefecture

Katsunori Ueno and Yukie Ueno

これまで、長野県ではオオバノハジチョウシダ *Pteris terminalis* Wall. ex J.Agardh var. *terminalis* は南信および北信の数か所で報告されているが、今回、その変種のオオバノアマクサシダ *P. terminalis* var. *fauriei* (H.Christ) Ebihara et Nakato を長野県では初めて天龍村で確認したので報告する (写真 1、2)。

1. オオバノアマクサシダ

オオバノアマクサシダは、側羽片上側に小羽片が欠落するかどうかでオオバノハジチョウシダと区別されてきたが、海老原 (2016) では、オオバノハジチョウシダの中で、無配生殖するものをオオバノアマクサシダと再定義して区別した。シダ植物では有性生殖する場合胞子嚢には 64 個の胞子が生産されて受精し発芽するが、無配生殖するものでは 32 個しか胞子は生産されず前葉体から受精せずに発芽するため、胞子の数をカウントすることで確認できる。また、形態にもはっきりした違いがあり、従来の側羽片の形態による区別よりも、小頂羽片が長く伸びる点が重視された (海老原 2016、中藤・海老原 2018)。小頂羽辺が長く伸びるものの中には、側羽片上側の小羽片がほとんど欠落しないものもあり、従来の区別ではオオバノハジチョウシダとされていたものもある。形態のこのような特徴は、胞子をつけていない未熟な葉では、オオバノハジチョウシダであってもオオバノアマクサシダのような形態となるため、必ず胞子を付けた成熟した葉で判断しなければならない。分布は、オオバノハジチョウシダのほうが寒いところにまで分布しており、オオバノアマクサシダは日本海側では福井までしか分布していない (海老原 2016、中藤・海老原 2018)。

2. 長野県のオオバノハジチョウシダ

長野県ではこれまで、オオバノハジチョウシダは、小谷村、天龍村、飯田市南信濃、泰阜村に記録がある (長野県植物目録編纂委員会 2017)。奥原 (1992) には小谷村で見たとされる生態写真が掲載されており、それを見ると小頂羽片が短く、典型的なオオバノハジチョウシダであった。また、天龍村の平岡の 2 か所、天龍村坂部、および飯田市南信濃においてオオバノハジチョウシダと思われるものを過去に見つけているが (上野・上野 2006、上野・上野 2013、天龍村坂部は未報告)、天龍村平岡のものはどちらもまだ小さく胞子嚢を形成するほどに成熟した株ではなかったために、オオバノハジチョウシダかオオバノアマクサシダかの区別をする



写真 1 天龍村のオオバノアマクサシダ
2018 年 7 月 21 日

* 上野勝典・上野由貴枝

〒 399-0011 長野県松本市寿北 2-2-38



写真2 採取したオオバノアマクサシダの標本



写真3 飯田市南信濃のオオバノハチジョウシダの羽片
2018年10月28日

ことができなかった。飯田市南信濃で見つけたものは、成熟して胞子を付けた株で写真3にあるように、小頂羽片が短く、これは典型的なオオバノハチジョウシダである。また、天龍村坂部のものは葉身が70cm以上と十分に成熟した大きさとなっており、また葉の形態も上記のオオバノアマクサシダの特徴を備えているものの、胞子囊群を確認することができず、オオバノアマクサシダとすることはできなかった。

3. 長野県のオオバノアマクサシダ

2018年4月に天龍村神原の急斜面のスギ林で見つけたものは、オオバノアマクサシダのように見えたが、そのときには葉が冬枯れしており、形態や胞

子囊群を確認できなかったため、同年7月に確認のため再来した。その結果、胞子のついた成熟した葉は、写真1、2にあるように、明瞭に小頂羽片が長くなっており、ところどころの側羽片上側の小羽片に欠落が見られ、オオバノアマクサシダの形態を持っていた。さらに、まだはじけていない胞子囊から胞子を取り出してカウントしてみたところ、32個を確認することができたので、オオバノアマクサシダと同定した。現地では、成熟した株が10株ほど群落をつくっていることから、だいぶ以前から生育していたものと思われる。オオバノハチジョウシダは沢沿いの水っぽいところでよく見かけるが、今回見つけたオオバノアマクサシダはスギ林の急斜面であり、オオバノハチジョウシダと生育環境に違いがあるように感じた。また、上記天龍村坂部のもの

もオオバノアマクサシダである可能性が高いので、今後確認したい。

なお、学名は岩槻（1995）では、var. *simplicior* (Tagawa) Shieh とされていたが、海老原（2016）で再定義により変更となった。

標本：NAC190409 2018 年 7 月 21 日 天龍村神原

最後に

オオバノアマクサシダは、各県の植物誌でも記載はあるものの、明瞭には区別されておらず、分布図や写真が出ているものはほとんどない。しかしながら、今回のように後に新たな知見により区別されることがあるので、過去に知られている特徴と一致しない特徴に気づいたときには、記録して残しておくことが重要であると感じた。

引用文献

- 岩槻邦男編 (1995) 日本の野生植物 シダ. 平凡社.
- 上野勝典・上野由貴枝 (2006) 長野県産シダ植物の新産地 (3). 長野県植物研究会誌 39: 123-127.
- 上野勝典・上野由貴枝 (2013) 長野県産シダ植物の新産地 (7). 長野県植物研究会誌 46: 119-123.
- 海老原淳 (2016) 日本産シダ植物標準図鑑 I. 学研.
- 奥原弘人 (1992) 信州の珍しい植物. 信濃毎日新聞社.
- 中藤成実・海老原淳 (2018) オオバノハチジョウシダとオオバノアマクサシダ. 日本シダの会会報 第 4 巻 29 号: 8-13.
- 長野県植物目録編纂委員会 (2017) 長野県植物目録. 長野県植物目録編纂委員会.